

論文

## 力と身体

——ドゥルーズとニーチェ哲学——

濱 中 健 太\*

## はじめに

ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) は後年、自らの哲学が「すべてはスピノザーニーチェの偉大な同一性を目指していた」と語っている (P, 185/272)<sup>1</sup>。ドゥルーズはニーチェについて「哲学史の合理的伝統に反する書き手」のひとりとして評価し、「私を救ってくれた」哲学者であり、「他の哲学者と同列に扱うのは不可能だ」とまで述べている (P, 14-15/17-18)。このようにニーチェがドゥルーズ哲学にとって最も重要な哲学者のひとりであることは明らかだ。

ドゥルーズ哲学は、大きくいうと、生成変化といった概念によって力動的な流れを肯定することを主題としている。この主題において、ドゥルーズはニーチェの「力 force」の哲学を継承している。ニーチェについてドゥルーズは、『ニーチェと哲学』(1962) と『ニーチェ』(1965) の二冊を著し、数多くのテーマについて論じている。後年では『批評と臨床』(1993) 第6章、第15章においてもニーチェは扱われる。

そこで本稿は、ドゥルーズがニーチェから継承したと考えられる「力」の概念を中心に据えて、「身体」概念との関係から、ドゥルーズのニーチェ解釈について時期をまたいで、総合的に検討することを目指す。

ドゥルーズのニーチェ解釈については榎村晴香による批判がある<sup>2</sup>。ここでその批判について詳細には検討しないが<sup>3</sup>、榎村は、ある種の身体運動については「彼 [=ドゥルーズ] の記述は光っている」としている<sup>4</sup>。批判のなかにあってもドゥルーズが論じる「身体」は、特異なものとして考えられている。

ドゥルーズにとっての「身体」といえば、「器官なき身体」という概念が思い起こされるだろう。しかし、本稿が主に扱う初期のニーチェ論には、まだ器官なき身体は登場していない。そのため器官なき身体という概念には触れることなく、ニーチェ的な「身体」をドゥルーズがどのように捉えたかを論じる<sup>5</sup>。

これまでの研究で、ドゥルーズのニーチェ論における身体は、初期の『ニーチェと哲学』を参照し、諸力の関係から構成されるものとして論じられることが多く、後期のニーチェ論とのつながりが論じられることは少ない<sup>6</sup>。初期と後期のニーチェ論における身体概念がどのように関係しているのかは明瞭ではない。後期のニーチェ論では、生成変化の議論とも関連する、諸力の「あいだにおける一闘い」によって生じる身体が論じられている。こうした後期の思索は、初期から連続しつつも変容したものである。本稿では、初期と後期をまたいでドゥルーズにおけるニーチェの身体の扱いの変容を考察することになる。

そこで本稿は、はじめに (1) ドゥルーズがニーチェ哲学における「力」と「力能の意志」をどのように捉えたのかを整理する。そして (2) 力と力能の意志の結びつきによるふたつの生成を提示し、「反動的生成」について検討する。次に (3) 「力」が「身体」と関係するものとして論じられている点を検討し、否定の反動的生成に対する肯定の能動的生成が「身体」を手引きになされていくことを考察する。(4) 後期に著された『批評と臨床』の第6章「ニーチェと聖パウロ ロレンスとパトモスのヨハネ」と第15章「裁きと訣別するために」を取りあげ、初期から後期へ

---

キーワード：力、力能の意志、身体、闘い、渦巻き

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2018年度入学 表象領域

のあいだでのドゥルーズ哲学におけるニーチェ論の展開をみながら、身体における「闘い」を扱い、力の複合体としての身体を論じる。最後に身体を「渦巻き」のイメージと重ねて論じることを試みる。そして力に捕らえられることと力を捕らえることとのあいだで生成しつづける「身体」がドゥルーズ-ニーチェによって示されていることを考察する。

## 1. 力と力能の意志

### 1-1. 力 force

ドゥルーズは「力の存在は複数であり、力を単独で考えるのはまさしく馬鹿げたことである。力は支配であるが、支配を行使される対象でもある」としている (NP, 7/29)。つまり、力は単独で存在することはなく、他の力との関係において複数で存在する。諸力は、支配し支配されという関係のなかで存在する。このような力とは「勝ち誇った概念」であり (NP, 56/106) <sup>7</sup>、つねにそれ自体として強さを示しつづけるものである。

ドゥルーズは、複数の力を「能動的力 la force active」と「反動的力 la force réactive」とに区別する。それぞれは以下のように説明される。

能動的力とは、(1) 支配し征服する可塑的な力であり、(2) 自らのなしうることの果てまで進む力であり、(3) 自らの差異を肯定し、その差異を喜びと肯定の対象とする力である。(NP, 69/128)

反動的力とは、(1) 部分的な適応と制限による功利的な力であり、(2) 能動的力をそれがなしうることから分離し、能動的力を否定する力 (弱者や奴隷の勝利) であり、(3) 自らのなしうることから分離された力、自己自身を否定したり、自己自身に敵対したりする力 (弱者や奴隷の統治) である。(NP, 69/128)

ひとつずつみていこう。「能動的力」は「自らのなしうることの果てまで進む力」とされるように、それ自体の強さによって事物を支配し可塑的な変化 (= 差異化) を起こすことで自らを「喜びと肯定の対象」にする。つまり能動的力は、対象に変化をひき起こすような攻撃的な力であり、変化自体を喜ぶ (= 肯定する) ものである。

次に能動的力との関係を前提として考えられた「反動的力」は、能動的力による支配や征服に適応し、それを引き受けるものである。そして能動的力が進み続けようとするのを「否定」し、決められた制限のなかで生を保持しようとする。そのため変化を喜ぶ (= 肯定する) ことを拒否し、禁欲的に自らを抑えつけるようとする。つまり反動的力は、支配への従属であり、変化を否定するものである。

### 1-2. 力能の意志 *volonté de puissance*

ドゥルーズの初期のニーチェ論では、複数の力の関係が注目される。では、複数の力を関係させるものは何か。それは「力能の意志 *volonté de puissance*」だと考えられている。本節では、諸力を関係づける力能の意志が、どのような作用を及ぼすものなのかを論じる。

ドゥルーズは「力能の意志」を「諸力の総合のための原理である」とし、「諸力の関係のなかで自らが行う規定に決して優越せず、つねに可塑的で、変身のうちにあるのだ」と述べる (NP, 56-57/107-108)。

では、力能の意志が諸力を総合し、規定するとはいかなることか。すでにみてきたように、力の存在は複数であった。複数の力は「補足を必要とし、また、この補足は内的な或るもの、内的な意志すること」に関係する (NP, 57/109)。諸力が関係をもつには「力の諸関係を規定することのできる要素」が補足されなければならない (NP, 57/109)。諸力のうちで、いかなる力が支配し、支配されるのかを規定するのが「力能の意志」であり、「力が従うのは力能の意志によってである」 (NP, 58/110)。諸力の関係の規定とは、どの力が優位となり、支配し、命令するのかという方向づけを行うことである (cf. NP, 58/110)。力能の意志は、諸力の関係を規定する「能力」であり、それまで無規定でそれぞれに強さを示していた諸力を総合する。

次に力能の意志が「可塑的で、変身のうちにある」とはいかなることか。諸力の強さには差がある。支配する力

が強くなる場合と服従する力が強くなる場合という差がある。この支配の関係を規定するのが力能の意志であった。ドゥルーズは「力能の意志は、諸力の発生や生産という観点からみれば、諸力のあいだの関係を規定するが、しかし自らの表出という観点からみれば、関係する諸力によって規定される」としている (NP, 70/129)。ここでは力能の意志の諸力の関係を規定する面と諸力の関係から規定される面の二重性が示される。つまり力能の意志は、能動的力と反動的力の働きを調整しながら、自らもその力のうちで、力に沿う形で発揮されるものと考えられる。力能の意志は、能動的力が支配する場合、肯定の意志として働き、反動的力が支配する場合、否定の意志として働くことになる<sup>8</sup>。このように力能の意志は、いかなる力が支配するかで、働かたが変化するため可塑的である<sup>9</sup>。

## 2. 「力」と「力能の意志」の結びつき

これまでで力がそれ自体で強さを示すものであり、力能の意志が諸力の関係を規定し、総合しつつ、自らも変身のうちにあるとまとめた。ドゥルーズは、この違いを端的に「力はなしうるものであり、力能の意志は欲するものである」と述べている (NP, 57/109)。ドゥルーズのニーチェ論では、この違いが重要なものである。本節では、ドゥルーズが重要だとする力と力能の意志の質の区別を確認し、能動と肯定、反動と否定の関係を明らかにする。そして、ニーチェ的な価値判断に触れて、いかなる形で力と力能の意志が結びつくかを論じる。

### 2-1. 力と力能の意志の質の区別

ドゥルーズは、次のように力と力能の意志を区別する。

〈能動的〉と〈反動的〉は、力の本来の質を示すが、〈肯定的〉と〈否定的〉は、力能の意志の本源的な質を示している。活動することと反動的に活動することが力を表現するように、肯定することと否定すること、価値評価をすることと過小評価をすることは力能の意志を表現するのである。(NP, 60/114)

力は「〈能動的〉と〈反動的〉」という質を示し、「活動することと反動的に活動すること」で表現され、力能の意志は「〈肯定的〉と〈否定的〉」という質を示し、「価値評価をすることと過小評価をすること」で表現される (NP, 60/114)。ドゥルーズは「この区別がつねにニーチェ哲学の中心で見出される」がゆえに、「最大の重要性を与えなければならない」としている (NP, 61/114)。ドゥルーズは、続けて「能動と肯定とのあいだ、反動と否定とのあいだには、深い親和性、共軛性がある」と述べる (NP, 61/114)。つまり能動は肯定と、反動は否定と結びつき働く。財津が指摘するように「力の意志の質としての肯定と否定に、勢力 [= 力 force] の質としての能動と反動が対応している」のである<sup>10</sup>。しかし、ドゥルーズは、能動=肯定、反動=否定ではなく、「肯定と否定は能動と反動からはみ出ている」といい、「肯定は能動ではなく、能動的生成の力能であり、能動的生成そのものである。否定は単なる反動ではなく、反動的生成である」とする (NP, 61/115)。ドゥルーズは、なにかを肯定することが能動的になる「能動的生成 *devenir actif*」と、なにかを否定することが反動的になる「反動的生成 *devenir réactif*」との二つの生成があるとする。力能の意志による肯定や否定という価値判断によって諸力が能動にも反動にもなりうることが明らかになる。

### 2-2. ニーチェ的な価値判断とふたつの生成

ドゥルーズは、ニーチェ哲学の否定的な力能の意志の発現である「反動的生成」を詳細に分析する。それは現状が否定の意志に従う人間が多くを占めるという認識からである。

ここで一度ニーチェによる価値判断について、ドゥルーズの理解に触れる。

ニーチェが〈高貴な〉、〈高い〉、〈主人的〉と呼ぶものは、あるときは能動的力であり、あるときには肯定的意志である。彼が〈低い〉、〈下劣な〉、〈奴隸的〉と呼ぶものは、あるときは反動的力であり、あるときには否定的意志である。(NP, 62/116)

ここでニーチェ的価値の「〈高貴な〉、〈高い〉、〈主人的〉と呼ぶもの」と「〈低い〉、〈下劣な〉、〈奴隷的〉と呼ぶもの」が示される。これはニーチェ的というと、前者が「強者」であり、後者が「弱者」である。強者とは「自由な快活な行動を含む一切のものごと」を「よい」とする「力強い肉体、今を盛りの豊かな溢れたぎるばかりの健康」をもつものである<sup>11</sup>。対して、弱者とは「惨めな者のみが善い者である。貧しい者、力のない者、賤しい者のみが善い者である」と考え、強者による価値を憎悪する「病める者」である<sup>12</sup>。

ニーチェは強者による価値を「よい」とみる。しかし、ニーチェによると、実際は弱者による逆転した価値のほうが蔓延している。これは弱者が強者に対してもつ「ルサンチマン」の感情によるとされている。ルサンチマンとは、嫉妬などの弱者が強者の強さを羨む感情である<sup>13</sup>。弱者は、強者の強さという価値をさげようと足を引っ張る。こうした弱者の蔓延をニーチェは非難する。

ドゥルーズによると、ニーチェ的価値は「能動的な諸力の観点からみれば「然り」であるものが、反動的な諸力の観点からみれば「否」となり、自己の肯定であるものが他者の否定となる」(NP, 63/118)。ドゥルーズは、本来は肯定的になるはずの能動的諸力が、反動的諸力によって弱められ、否定へと姿を変えてしまうことを明らかにする。

否定の反動的諸力が「支配的、攻撃的、制圧的になる」ことで優位になるとはいかなることか (NP, 64/119)。それは「支配される」ことに甘んずる態度である。このとき、反動的諸力の振る舞いは「能動的力をこの力がなしうることから分離するのである」(NP, 64/119)。つまり「否定」の力能の意志は、能動的諸力を弱め、支配することで、反動的諸力へと方向転換させてしまうのである。この方向転換が「反動的生成」である。

能動的諸力が否定の力能の意志によって、反動的諸力へと方向を変えてしまう反動的生成は「ニヒリズム」の勝利である。ニヒリズムにつながるのは「怨恨」、「疚しい良心」、「禁欲主義的理想」として分析される。「怨恨」は、弱者が「私が弱く、不幸なのはおまえのせいだ」とし、能動的諸力を発揮する強者に対して反感を抱き、能動的諸力を避けようとするものである (N, 24/50)。「疚しい良心」は、弱者が自らにある規範を内面化し、その規範から逸れるときに罪を感じることで、自らを罪深い者にする。そして周囲にも規範を適用し、能動的諸力を発揮しようとする強者にまで、それは罪であると指摘し、弱者の共同体に引き入れようとする。

怨恨と疚しい良心は、否定の力能の意志として働く。否定の力能の意志を発揮する人間は、誰もが出すぎることのない「弱い生」を望む。こうした否定の力能の意志は「虚無への意志」であり、「弱く、手脚をもがれた、反動的な生しか容認しない」(N, 24/50-51)。反動的な生をもつ人間は、「奴隷たちが主人と名のり、弱者たちが強者と自称し、低劣さが高貴さと呼ばれる」のを理想とする (N, 25/51)。こういった誰もが出すぎないことを望むのが、「禁欲主義的理想」である。ドゥルーズ-ニーチェは、反動的力が支配することを望む「人間-反動性」が生を貶め、生を否定すると考える。

ドゥルーズのニーチェ論では、単純な能動=肯定、反動=否定ではなく、あくまでも「能動的生成」と「反動的生成」のふたつの「生成」が重要である。ドゥルーズは、ニーチェ論の軸を「生成」においている。反動的生成は、力に支配される形で存在する。この生成は、変身を望まない弱者に留まることを欲する。対して、能動的生成は、諸力を肯定的に発揮し、自らの変身を喜びとする強者へ向かうことを欲する。力能の意志が「欲するものである」とされるのは、ふたつの生成のどちらを欲するようになるのかに関わるからである。

### 3. 身体 corps

前節では、否定の力能の意志によって、能動的諸力の発揮が阻害されていることを示した。この反動的生成が人間のありかたとした。しかし、ドゥルーズは、「肯定」の力能の意志の発揮こそが重要であると考え。そして、人間が「能動的生成」へと向かわなければならないとする。本節では、能動的生成へと向かうための手引きとして「身体 corps」に注目する。

ドゥルーズは「力能の意志は身体であるが、われわれに身体を認識させる病なしに、われわれは身体についていったい何を知っているだろうか」と述べる (NP, 198/335)。ここで「身体を認識させる病なしに」とされる「病」こそ、ニヒリズムであり、虚無への意志である。つまり、われわれが身体としての力能の意志を知るためには、まず否定の力能の意志に気がつかなければならない<sup>14</sup>。ドゥルーズは、虚無への意志という「否定」を否定し、「肯定」を目

指す。このとき身体は、自らを能動的に破壊する欲望を抱こうとする。それは病の克服である。そして、自己超克としての創造へと向かう。本稿では、「肯定」の力能の意志へと向かうものが「身体」だと考える。つまり、ドゥルーズのいう「力能の意志は身体である」についてより深く考察していく。

ドゥルーズは『ニーチェと哲学』第2章で「なんらかの非対等な二つの力が関係を結ぶとそれらの力はひとつの身体を構成する」という (NP, 45/90)。二つの非対等な力は、すでにみえてきた能動的諸力と反動的諸力のことである。諸力によって身体は構成される。では「身体」とは何か。ドゥルーズは次のようにいう。

身体とは何か。われわれは身体を諸力の場、多数の力が争いあう養生的環境だといったとしても定義したことにはならない。というのは、実際には、諸力の場や戦闘も「環境」も存在しないからである。(……) つまり、互いに「緊張関係にある」力の量以外には何も無いのだ。あらゆる力が、従うためであれ、命令するためであれ、他の諸力との関係のうちにある。身体を定義するのは、支配する諸力と支配される諸力のあいだのこの関係である。(NP, 45/89-90)

ここでは力の場があるのではなく、諸力の「緊張関係」にある身体が想定される。そして身体は、支配する力と支配される力の「あいだの entre」関係として定義される。こういった諸力の関係から構成される身体は時として「驚くべき」ものとして現れる (NP, 45/90)。まったく偶然としかいえない出来事によって身体は変容を余儀なくされる。これは諸力の緊張関係が、ある一方の方向へと傾くことによって起こる。こうした諸力の関係が「力の本質でもある」とされる (NP, 45/90)。

続けてドゥルーズは、「身体」を次のようなものとする。

したがって、生ける身体はどのように生まれるのか、とは問われまいだろう。なぜなら、あらゆる身体は、それを構成する諸力の「任意の」産物として生きているからである。身体は多様な現象であり、還元不可能な多数の力で構成されている。身体の統一性は多様な現象の統一性であり、「支配の統一性」である。(NP, 45/90)

ドゥルーズが力能の意志を身体とみていることは前述した。ドゥルーズもいうように、ここで論じられるのは「生ける身体」の発生ではない。「身体」は、諸力の関係から構成され、諸力がいかにして発現するかによって考えられるものである。身体はあらかじめ決まった形をもつものではなく、多様な現象、多数の力の統一から構成される。多様な現象、多数の力を統一するのが力能の意志である。力能の意志は、いかなる力が支配するかを決定するものであった。力能の意志が多数の力を統一することで身体は産み出される。力能の意志が諸力の方向を決定し統一することで、身体を産み出すことから「力能の意志は身体である」とされるのである。

#### 4. 力の複合体としての身体

ドゥルーズの初期のニーチェ論では、前述した以上には「身体」について論じられていない。初期のニーチェ論では、諸力がいかにして関係を結ぶかに重点を置き、諸力の「関係」に注目することで、身体を論じていた。以降で論じる後期のニーチェ論で、ドゥルーズは、諸力を「流れ」として捉え、流れのあいだでの「闘い」において、身体は産出されると考えている。

本節では、ドゥルーズ哲学後期の『批評と臨床』第6章「ニーチェと聖パウロ ロレンスとパトモスのヨハネ」、第15章「裁きと訣別するために」を扱って、ドゥルーズにとってのニーチェ的身体の議論の深まりを考察する。

##### 4-1. 裁き

ドゥルーズは、『批評と臨床』の第15章「裁きと訣別するために」で、身体についてニーチェも交えながら論じている。ここでドゥルーズは神学的な「裁き」と身体とを対立させる。

「裁き」とは、神に対する負債を巡るものである。ドゥルーズによると、裁きが前提とするのは「神々が人間に宿

命を与えること、そして、人間がその宿命によってこれこれの形式、これこれの組織的な目的=終末 fin にふさわしいものであること」である (CC, 161/265)。人間は、神=真なるものを頂点にして、判断の基準としたうえで、真正さについて裁く。

ドゥルーズは、ニーチェの主題が「上位の価値の名において生を「裁く」という思い上がりを告発すること」だと指摘する (CC, 161/265)。この主題は、ニーチェによるキリスト教への批判や、前述した弱者による共同体が上位となり、強者の生を裁くという価値判断への批判からも明らかだろう。上位の価値を中心に置く裁きは「神による断固たる裁き」ではなく、「人間による誤った判断=裁き」である (CC, 161/265-266)。

こうした裁きに対立するものひとつとしてドゥルーズは「身体」を挙げる。ドゥルーズによれば、裁きが「諸身体の真の組織化 organisation」を前提するのに対して、身体は「それが一個の「有機体 organisme」ではなく、「諸器官の組織化を奪われている」とされる (CC, 163/268-269)。つまり裁きが前提とするのは、諸器官の調和がとれた統一的な身体という理想である。対して裁きを逃れる身体は、諸器官の調和による組織化されたものではなく、諸力の「闘い」によって成り立つ身体である。

#### 4-2. ふたつの「闘い」

ドゥルーズのいう「闘い combat」は、あらゆる上位の価値を前提にすることなく、新たな存在様態の創造を予感させるものである (cf. CC, 168/276)。後期のドゥルーズのニーチェ的な身体を解釈するうえで「闘い」は、重要な概念となる。

ドゥルーズは「闘い」をふたつに区別する。それは「對抗する-闘い *combats-contre*」と「あいだにおける-闘い *combats-entre*」であり、「〈他者〉に対する闘いと〈自己〉のあいだでの闘い」ともされている (CC, 165/271)。

對抗する-闘い、〈他者〉に対する闘いは、裁きに対しての闘いであり、裁きを執り行う諸審級への對抗として現れる。この闘いは「一つの力を破壊したり、押し返したりしようとする」(CC, 165/271)。つまり、支配に対抗し、それに打ち勝とうとするために力を発揮する闘いである。

あいだにおける-闘い、〈自己〉のあいだでの闘いは、次のように述べられている。

あいだにおける-闘いは、反対に、ある力を捕らえてそれを自分のものにしようとする。あいだにおける-闘いとは、ある力が他の諸力を捕らえて、ある新しい調和のなかに、ある生成のなかに、それらに自らを結びつけることによって、その力が自らを豊かにする過程なのである。(CC, 165/272)

對抗する-闘いは、外的な力の支配に対しての闘いであったが、あいだにおける-闘いは、人間があらゆる物体などのもつ諸力を捕らえて、自らのもつ力と結びつける、力と力の関係における闘いである。ここでは、諸力のあいだに生じる力関係は、闘うことによって、豊かになっていくと考えられている。ドゥルーズは、この諸力の力関係の「あいだにおける-闘い」を「生成変化」とみているのである。

ニーチェ論においてドゥルーズは、諸力の力関係が生じているのが「身体」だと考えていた。ドゥルーズによると、ニーチェ的な身体は「非-器官組織的な生命力」と関係する。

非-器官組織的な生命力とは、知覚しえない諸力、または力能による身体の関係のことであり、それらは身体を捕らえており、あるいは身体はそれらを捕らえている。(CC, 164/270)

ここでいわれるように、身体は力に捕らえられつつ、力を捕らえるため、諸力の「あいだに」位置するものである。ゆえに、力と身体の関係は、切り離して考えることができない。ドゥルーズは、ニーチェ的な身体を「身体を生成において、強度において、触発し触発される力として、つまり力能の意志として定義する」と述べる (CC, 164/270)。ドゥルーズにとって、ニーチェ的な身体は、理想的な身体が基準として置かれるのではなく、諸力のあいだで闘いながら生成するものである。闘いのあいだで、自らを変身させる身体=力能の意志が初期のニーチェ論以上に重要となる。

### 4-3. 力の複合体としての身体

諸力のあいだでの闘いとは、どのように考えられるのか。例えばワクチン接種を考えてみる。ワクチン接種を行うことで、身体は従来ならば感染していたものに対して抗体を作り出す。ウイルスの力を身体に結びつけることで、感染症に対する免疫を備えた新たな身体へと変化する。この場合は、弱められたウイルスのもつ力と身体のもつ力が闘うことになる。そして結果として身体の力が勝るようにする。ウイルスと身体との関係のように、身体は自らを保つためにつねに闘っている。これは各器官においても同様だろう。臓器はそれぞれに力を発揮し闘う。各器官のもつ力のあわさる多様体が身体だと考えられるだろう。諸力のあいだでの闘いは、身体という自己において生じている<sup>15</sup>。

ここまでは病気を例にみたが、ドゥルーズはいたるところに闘いがあるという。「事物が闘いのさなかに到来し、生成し、その闘いが事物から諸力を作り上げるようないたるところなのである」(CC, 166/273)。テニス選手が技術を習得していくうちにラケットまでも身体の一部と捉えるように、事物の力を捕らえ、自らの身体の力を変化させるのもまた「闘い」である。このように、身体のもつ力はただ一つではなく、事物のもつ力との関係において変化していく。世界には多様な力が存在しているが、その力のすべてが潜在的には自らに結びつきうる。

ドゥルーズは「力能の意志は身体である」としていた。これをもう一度『批評と臨床』での議論から考えてみる。

潜勢力 *puissance* とは、諸力からなる特異体質、それも支配する力が支配される諸力のなかを通ることによって変化し、支配される諸力も支配する力のなかを通ることによって変化する、そんな特異体質である。これが変容 *métamorphose* の中心である。(CC, 167/275)

身体は多様な力のあいだにある。そして自らのもつ力と諸力とが結びつくことで変容する。病気に侵されれば弱くなる。さまざまな物を使いこなすことで新たなことができるようになり強くもなる。身体は、諸力のあいだで、諸力に翻弄されながら、自らを維持しようとする。この維持されようとする身体は、諸力との闘いにより変化しつづけるため、安定したものではない。身体はつねに諸力を自らに結びつける複合体である。この身体はつねに変容に開かれている。変容に開かれた身体は、諸力との関係の「あいだに」において生成する。このような身体が裁きから逃れるのである。

裁きは、あらゆる新しい存在様態が到来するのを妨げてしまう。なぜなら、新しい存在様態は、自らの力によって創造されるもので、つまり、自分がうまく捕える方法を知っている力によって創造されるものであり、そして、新しい組み合わせを存在させる限りにおいて、それ自身で価値をもつものであるからだ。(CC, 168-169/276-277)

「自らの力」と「自分がうまく捕える方法を知っている力」とのあいだでの闘いで生じる新たな存在様態である身体は、諸力のあいだで生成し、変容しつづけながら存在する。

### 4-4. 渦巻きと身体

ここまでで、ドゥルーズによるニーチェ的な身体が諸力の「あいだにおける一闘い」で生成されていくものだと示した。最後にドゥルーズがこの闘いを「渦巻き」というイメージで捉えている点に言及し、身体と関係づけられないか試みる。

ドゥルーズは、ニーチェと D. H. ロレンスを結びつける『批評と臨床』第6章「ニーチェと聖パウロ ロレンスとパトモスのヨハネ」で「渦巻き」を論じる。ドゥルーズの思考のなかで、ニーチェとロレンスはつながっており、すでに扱った「裁きと訣別するために」のなかで、「ロレンスは、強力にニーチェを再発見する」とされている (CC, 167/275)。ニーチェとロレンスのつながりは「象徴 *symbole*」概念から考えられている。

ドゥルーズは「裁きと訣別するために」のなかでの「変容の中心」をロレンスの「象徴」概念と結びつけて考える。

それ〔=変容の中心〕こそが、ロレンスが象徴と呼ぶもの、つまり、振動しかつ広がっていく、何も意味しないが、われわれが可能な諸力の最大限をあらゆる方向のなかで捕らえるほど回転させ、それぞれの力が他の力との関係に入ること、新たな意味=方向を受け取る強度的な複合体である。(CC, 167-168/275.〔〕内は筆者による。)

「ロレンスが象徴と呼ぶもの」は、それ自体が意味をもつものではなく、力と他の力が関係することで、初めて「新たな意味=方向」へと広がっていくものである。ドゥルーズにとって、ロレンス的な象徴は、諸力の関係のあいだでつねに変容していくものであり、生成変化を起こすものである<sup>16</sup>。

ドゥルーズは、ロレンス的な象徴概念を評価しており、『批評と臨床』第6章「ニーチェと聖パウロ ロレンスとパトモスのヨハネ」でも言及する。

それ〔=回転式の象徴〕は始まりも終わりもなく、われわれをどこにも導かず、どこにも到達せず、とりわけ終着点もなく、段階さえもないのである。それ〔=回転式の象徴〕はつねに真ん中に、事物の中間に、事物とのあいだにある。象徴は、大渦巻きであり、解決や決定が突然現れる激しい状態を生じさせるまで、われわれを回転させる。象徴は、行為と決定の過程である。その意味で、象徴は渦巻きのイメージを与える神託に結びつけられる。(CC, 65/104.〔〕内は筆者による。)

ここで「象徴」は「渦巻き」として捉えられている。さまざまな力の流れのなかに生じる象徴の「渦巻き *tourbillon*」は、「始まりも終わりもなく、われわれをどこにも導かず、どこにも到達せず、とりわけ終着点もなく、段階さえもない」ものとして捉えられ、「つねに真ん中に、事物の中間に、事物とのあいだにある」。渦巻きは、力と力との接触によって生じる。例えば、渦潮は、潮の流れの速度差によって生じる。潮の流れの速いと遅いは、それぞれに別の力であり、それらが接触することで回転する渦となる。このようにドゥルーズにとって「渦巻き」のイメージは、さまざまな力の流れが集まり、ぶつかる場所である。

この渦巻きというイメージと身体とを重ねて考えられないだろうか。事物がもつ力とのあいだで身体は生きる。われわれは生まれたときから、さまざまな事物との関係のなかで育つ<sup>17</sup>。ドゥルーズは「(……) 流れとしての、流れの調和としての自分、他の流れと、自己の外で、そして自己のうちで関係をもつ自分を生きること」を「諸力あるいは流れの生」とする (CC, 68-69/109)。この「流れの生としての魂は、生きる意志であり、対立であり闘いである」(CC, 68-69/109)。「流れの生」は、これまでの論からドゥルーズが論じる諸力の闘いによって構成されるニーチェ的な身体のものとして考えられる。身体は、諸力の流れに曝され、流れと流れがぶつかりあう闘いによって、外の力と内的な意志とを混淆する複合体となる。身体は、渦巻きのように、諸力に巻き込まれることで外とつながり、巻き込んだ力を吹き上げ、自らの内の力能を発揮する。こうしたドゥルーズーニーチェ的な身体は、つねに諸力の「あいだで」渦巻く、始まりも終わりもない生成のなかにある。この身体は、自らとは無関係にみえる諸力とのあいだにあっても、さまざまな力関係のうちに巻き込まれていき、翻弄されつつ、闘うことで変容を強制され、変容を肯定することで成り立つものである。

「渦巻き」のイメージで示される「身体」は、巻き込む力と吹き上げる力という諸力の関係によって構成される。この諸力の流れをいかにして捕らえていくかが身体において重要である。このときに、いかなる力に従うのかという「決断」を迫られる。ドゥルーズは「決断することは、裁きではなく、裁きの組織的帰結でもない。決断は、われわれを闘いのなかに引きずりこむ諸力の渦から生き生きと噴き出てくる」としている (CC, 168/275)。では、「決断」が何かと考えると、ニヒリズムの克服となる「生きる意志」の発揮のことだろう。こうした「生きる意志」を発揮する身体は「諸力を多様にし、豊かにして、おのおのが他の力に反作用するような最大限をそこから引き出そうとする」ものである (CC, 168/275)。このようにして「身体」は、諸力のうちでも、自らを変化させる力に巻き込まれ、そこから自らの力の最大限を発現させ、生の価値を否定することなく肯定する能動的生成である「強い生」へと向かうことになるだろう。

## おわりに

本稿は、ドゥルーズの初期のニーチェ論から「力」と「身体」について論じるものの関係を整理し、後期に書かれたものと接続し、ドゥルーズのニーチェ解釈について時期をまたいで総合的に検討した。ドゥルーズは『ニーチェと哲学』、『ニーチェ』において、ニーチェによる「力」概念を「能動的力」と「反動的力」とに区別していた。これらの力は「勝ち誇った概念」として、それ自体が強さをもつものであった。本稿では、これらの力をそれぞれに変化させる力と変化を否定する力として捉えた。

そして「力能の意志」により、諸力が肯定的に、あるいは否定的に評価されることを確認した。力能の意志によって、諸力は結びつけられて発現するようになる。この諸力の結びつきのうち、ニヒリズムの勝利という「反動的生成」が蔓延することを問題とした。反動的生成とは、反動的力が否定の意志と結びつき、変化を拒否する形で発現することであった。ドゥルーズは、変化を拒否する力の発現は「弱い生」であるとして反動的生成を否定した。

初期のニーチェ論において、ドゥルーズにとっての「身体」は、諸力の緊張関係によって構成された。こうしたドゥルーズによるニーチェ的な身体は、後期でさらに展開される。『批評と臨床』では、諸力の緊張関係であるとされた身体が、諸力との「あいだにおける一闘い」だとされた。身体は、諸力のあいだで、力に捕らえられつつ、力を捕らえる闘いのなかで、自らを新たな存在様態へと変容していく。本稿では、この身体を「渦巻き」のイメージと重ねて論じた。渦巻きとは、つねに変容の途上にあり、生成変化していくものである。身体は、生成変化の渦の中心にあり、いかにして渦の流れを捕らえるかという「決断」によって、「生きる意志」を発揮する。そして身体は、諸力から最大値を引き出し、自ら変化を肯定する力に巻き込まれ、能動的生成である「強い生」へと向かう。

以上のようなドゥルーズ哲学におけるニーチェ的「身体」概念は、今後の研究で、今回は詳述できなかった「器官なき身体」概念との関係をよりはっきりさせる必要があるだろう。ドゥルーズにとって、器官なき身体は強度の流れの場であり、流れのなかから自らを変化させる力を生み出すものである。こうした器官なき身体は、ニーチェ的身体における諸力の流れのあいだでの闘いとされたものを発展させたものであると考えられるだろう。ニーチェ論以降に論じられる器官なき身体は、分裂症的なものとの関係で論じられる。身体を通過するさまざまな物体の力に巻き込まれていく能動的生成は、分裂症的な身体の萌芽だと考えられるだろう。こうした身体概念をより深く検討するためには、『アンチ・オイディプス』あるいは『千のプラトー』によって詳しく論じられる「器官なき身体」概念において、ニーチェ哲学の影響を詳細に検討していく必要がある。器官なき身体概念へのニーチェ哲学の影響についての詳細な検討は今後の課題としたい。

## 凡例

ドゥルーズの著作からの引用は以下の略号を用いて原典、邦訳の順に頁数を示す。引用に際し、邦訳を参照したが、筆者の責任において改訳した箇所もある。

Gilles Deleuze,

NP : *Nietzsche et la philosophie*, PUF, 1962. (『ニーチェと哲学』江川隆男訳、河出文庫、2008年。)

N : *Nietzsche*, PUF, 1965. (『ニーチェ』湯浅博雄訳、ちくま学芸文庫、1998年。)

P : *Pourparlers 1972-1990*, Minuit, 1990. (『記号と事件——1972-1990年の対話』宮林寛訳、河出文庫、2007年。)

CC : *Critique et clinique*, Minuit, 1993. (『批評と臨床』守中高明・谷昌親訳、河出文庫、2010年。)

## 註

1 先行研究では、ドゥルーズのいうスピノザとニーチェをまとめるといった関係は論じられている。そこではドゥルーズがスピノザとニーチェとに類似点を探り、同一性をみていることが指摘されている (cf. 大崎晴美「ドゥルーズにおけるスピノザとニーチェの同一性：哲学における実践と批判の結合の試み」『哲学論文集』(九州大学哲学会) 第30輯、1994年、59-75頁。あるいは、大崎晴美「“力”の無神論——初期ドゥルーズにおけるスピノザとニーチェの同一性の基盤」『現代思想』第30巻10号、2002年、106-124頁)。たしかにこうした指摘は、ドゥルーズの述べたことに合致しているため重要である。スピノザとニーチェの類似点は、ドゥルーズが力と身体を論じる方法にも関係する。しかし、これらの研究では、力の部分を大きく取り上げることで両者を近づけており、身体については深く踏みこめて

いない。

- 2 櫻村晴香「ドゥルーズのどこが間違っているか?——強度=差異、および二重のセリーの理論の問題」『現代思想』第24巻1号、青土社、1996年、174-193頁。
- 3 櫻村は、ドゥルーズのニーチェ解釈における「永遠回帰」について批判している。櫻村は、ニーチェの永遠回帰は「現実的「体験」という「病の発生」として訪れるのに対し、ニーチェを解釈するドゥルーズは、ニーチェの「幻想に魅惑されている」に過ぎないとしている(同前、174頁)。永遠回帰は、ニーチェにとって「あらゆる不幸と興奮が渦巻いている」状態であるが、ドゥルーズにとっては「穏便な幸福の気配こそが支配的」だとされる(同前、175頁)。そしてニーチェが「差異-強度の場の軋み」を生きるのに対し、ドゥルーズは「差異-強度」への「賛歌をこそ響きわたらせる」とされる(同前、175頁)。この指摘は、ニーチェの生涯と思想との関係が考慮されているとも考えられる。しかし、本稿は、こういった指摘に対し、ドゥルーズがニーチェを解釈しつつ論じる「身体」概念もまた「差異-強度の場の軋み」を生きるものではないかと考える。
- 4 同前、191-192頁。〔 〕内は筆者による。「(……) 身体制御回路それ自体のある種オーバーフィードバック的な事件による言語回路を経ずに生ずる、いわばローカルな身体表層の異変についてこそ、彼の記述は光っている」。
- 5 前掲の櫻村は、「器官なき身体」によってドゥルーズがニーチェ(あるいはクロソウスキー)から「完全に「離陸」する」(同前、179頁)というが、本稿ではこれに同意しない。例えば宇野邦一が「スピノザ、(そしてニーチェ)、アルトー、ドゥルーズを結びつける「器官なき身体」の思考の系譜」(宇野邦一『ドゥルーズ——群れと結晶』河出ブックス、2012年、129頁)としているように、器官なき身体概念においてニーチェ哲学からの影響は考えられるはずである。本稿は、器官なき身体概念の前段階としてニーチェ的な「身体」を考えていく。
- 6 ドゥルーズのニーチェ論を力と身体との関係から論じたものには以下のものがある。  
Sergey Toymentsev, "Active/Reactive Body in Deleuze and Foucault," in *Journal of Philosophy: A Cross-Disciplinary Inquiry*, 5 (11), Society for Philosophy and Literary Studies, 2010, pp. 44-56.; Philipa Rothfield, "Dance and the Passing Moment: Deleuze's Nietzsche," Laura Guillaume and Joe Hughes eds., *Deleuze and the Body*, Edinburgh University Press, 2011, pp. 203-223.  
Toymentsevは、諸力の関係から生じる能動的身体について、本稿とは異なり永遠回帰との関係から論じている。Rothfieldは、ドゥルーズのいうニーチェの身体を、諸力が会おうたびに、形成し改編されるものとしている(p. 205)。そしてこの身体を創造(とくにダンス)に関わるものとして扱う。Rothfieldによるドゥルーズのニーチェの身体の捉えかたは本稿と近い。しかし、いずれの論考にしても、本稿が扱う後期のニーチェ論には言及していない。
- 7 cf. フリードリッヒ・ニーチェ『権力への意志』原佑訳、下巻、ちくま学芸文庫、1993年、六一九(152-153頁)。
- 8 ここで注意すべきは、服従という否定もまた力として考えられるという点である。ニーチェ的には、服従という状態に停留しようとすることもまた力の発現である(cf. NP, 60/113)。
- 9 すでにみてきたように力能の意志は、可塑的で変化するものであるため、ある特定の力へ向けてのみ発揮されるわけではない。つまり、既成の「権力への意志」、支配者になるための意志ではない。ドゥルーズによる解釈で、「力能の意志」となるのは、力能の意志に諸力の関係を規定する面と諸力の関係から規定される面の二重性があることに依拠する。力能は、諸力との「あいだで」発揮されるものであり、強くも弱くもなりうるゆえに、既成の強さとしての権力に向けてのみ発揮されるわけではない。これはドゥルーズがニーチェの「Der Wille zur Macht」を「La volonté de puissance」とすることに関係する。ドゥルーズによる解釈を巡っては次を参照した。大崎晴美「ドゥルーズにおける批判哲学——カントからニーチェへ」『哲学年報』第56輯、1997年、112-120頁。
- 10 財津理「ドゥルーズとニーチェ——力の意志あるいは創造のエレメント」『思想』第855巻、1995年、46頁。〔 〕内は筆者による。財津はKraft, forceを勢力とし、Macht, puissanceを力としている。そして、ドゥルーズの解釈によるforceがエネルギー(現実態)、puissanceがデユナミス(可能態)であるとアリストテレス的な解釈を示している。
- 11 フリードリッヒ・ニーチェ『道徳の系譜』信太正三訳、『善悪の彼岸 道徳の系譜』所収、ちくま学芸文庫、1993年、第一論文、七(387-389頁)。
- 12 フリードリッヒ・ニーチェ『道徳の系譜』信太正三訳、『善悪の彼岸 道徳の系譜』所収、ちくま学芸文庫、1993年、第一論文、七(387-389頁)。
- 13 cf. 宮原浩二郎「[超人]のヴィジョン: ニーチェという問題」『関西学院大学社会学部紀要』第63号、1991年、375-379頁。
- 14 ニーチェは「私たちはニヒリズムをまず体験しなければならない」という(フリードリッヒ・ニーチェ『権力への意志』原佑訳、上巻、ちくま学芸文庫、1993年、序言4(14-15頁))。
- 15 ニーチェは、身体を「戦争」とし、「自我」という精神の向こうに身体という「自己」があるという(フリードリッヒ・ニーチェ「身体を軽蔑する者たちについて」『ツァラトゥストラ』吉沢伝三郎訳、上巻、ちくま学芸文庫、1993年、61-62頁)。
- 16 ドゥルーズは「われわれが語っている四人の作家〔=ニーチェ、ロレンス、カフカ、アルトー〕は、いわゆる象徴派であり得る」と述べ、彼らの使う象徴が「諸力を凝集させ、力の複合体を構成する」としている(CC, 168/275-276)。〔 〕内は筆者による。
- 17 ドゥルーズは「赤ん坊とは闘いである」と述べる(CC, 167/274)。

# Forces and Body: Deleuze and Nietzsche's Philosophy

HAMANAKA Kenta

## Abstract:

This paper is a comprehensive examination of Gilles Deleuze's interpretation of the conceptual relationship between the force and the body on the bases of Nietzsche's philosophy in Deleuze's early-late study. First, I demonstrate how Deleuze understood two concepts such as the force and the will to power in his early study on Nietzsche's philosophy. According to Deleuze, the connection of these two concepts brings about two types of becoming: "becoming reactive" and "becoming active." My second task is to interpret the becoming reactive from nihilism. Third, I clarify Deleuze's interpretation of the body from the concept of becoming active. In the fourth examination, I deal with the concept of combat from his late study on Nietzsche's philosophy, which eventually conceptualizes impinging dynamics such as the more-developed idea of body and its overlapping image of the whirlpool. The result shows Deleuze's distinct development in Nietzsche's conception of the body: the combat between the body captured by forces and the body capturing forces. The body conceptualized by Deleuze is constantly transformed into new forms by the action of forces.

Keywords: Force, Will to Power, Body, Combat, Whirlpool

## 力と身体

——ドゥルーズとニーチェ哲学——

濱 中 健 太

## 要旨：

本稿は、ドゥルーズによるニーチェ解釈の「力」概念と「身体」概念との関係について、時期をまたいで、総合的に検討するものである。はじめにドゥルーズが初期のニーチェ論で「力」と「力能の意志」をどのように捉えたのかを整理する。そして力と力能の意志の結びつきによる「反動的生成」と「能動的生成」の二つの生成を提示し、ニヒリズムに基づいた「反動的生成」について検討する。次に力が「身体」と関係するものとして論じられる点を確認し、身体を中心とした「能動的生成」について考察する。最後に後期のニーチェ論から「闘い」の概念を扱い、諸力の闘いから生じる身体を論じ、「渦巻き」のイメージと重ねる。本稿は、ドゥルーズによって、力に捕らえられることと力を捕らえることのあいだで生成するニーチェ的「身体」が示されることを明らかにし、ドゥルーズによる身体概念を諸力のあいだで、自らを新たなものへと変容していくものだと論じる。

